

ジョン・ダンの「風刺詩二番」 の主題について*

久野幸子

On the Theme in John Donne's "Satyre II"

Sachiko Kuno

1

ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の風刺詩は、前世紀末の〈ダン再評価〉の頃から今世紀80年代半ばの現在に至るまで、概して、彼の抒情詩や宗教詩、『周年追悼詩』程高い評価を受けてはいない。そして、その風刺詩五篇の中でも、特にこの「風刺詩二番」("Satyre II") は、一貫した主張を欠いた、ダンらしい特徴の乏しい、失敗作、駄作と考えられることが多いようである。例えば、1967年にダンの風刺詩のすぐれた版を出したウェズレー・ミルゲートでさえ、この詩の主題について、

'Satire II' is not mainly concerned with a specific poet, with a type of poet, or even with poetry in general; but the figure of Coscus enables Donne to give some appearance of unity to his satire of the abuse of poetry, and, more important, of the abuse of law.¹

と説明し、この引用文中の“some appearance of unity” (一貫性らしきもの) という表現が示すように、内容上、二つの主題を各々扱う二つの部分に分裂し

てしまっていると考えている²。つまり、ミルゲートを含め、多くの研究者が、ダンはこの「二番」の中で、コスカス (Coscus) と呼ばれるある人物の行動を軸に、前半では〈詩〉の、後半ではもっと重大な〈法律〉の“abuse”，即ち、濫用、誤用、悪用を風刺していると捉えてはいるものの、詩人も弁護士も共に〈言葉〉を用いて生活してはいるが、このように一つの風刺詩の中に〈へぼ詩人〉と〈悪徳弁護士〉という二つの主題が並存する必然性は余り認められない、と主張するのである。

しかしながら、実はダンはこの「二番」の中で、“abuse of poetry” と “abuse of law” のみを風刺しているわけではないのではないか。何故なら、話者 “I” の批判は、〈へぼ詩人〉や〈悪徳弁護士〉を越えて、彼ら以上に〈詩、つまり言葉〉を濫用し、〈法律、つまり制度〉を悪用する人々に向けられ、更にそれらの人々の寄食を許す当時の腐敗した社会そのものに向かっていると思われるからである。

一方、このような〈詩〉の濫用についての批判は、当然、風刺詩人としての自己を省みることも促す。社会風刺というものは、効力を持つなら、風刺詩人は〈身の危険〉にさらされるだろうが、効力を持たないのなら、それはそれで、彼に無力感、挫折感を味わわせることになる。それ故、ダンはこの詩の中で、腐敗した社会における風刺詩人の社会的役割とその限界といった問題をも提示している。例によって、詩の中の話者 “I” はダンであってダンではないのだが³、この詩にも、勿論、創作当時、即ち、1594年頃のダンの内面が種々な形で反映されていよう。そこで、本稿では、風刺の主題という点を中心にこの詩を詳しく分析し、当時のダンの人間像の一端を解明してみたい。

2

この「二番」は112行からなる。ダンの他の風刺詩と同様、この詩も「対句」詩型をとるが、書き出しの部分は書簡体となっている。クレイトン・レインが詳細に指摘しているように⁴、この詩には、殆ど作品全体に渡って、主題、メタ

フォー、場面構成や論理的展開等において、ラテン風刺詩を思い出させるところが多く、この詩が1590年代の英国で大流行をした、ラテン風刺詩の〈模倣〉をも目的の一つとして書かれたいわゆる“formal verse satire”に属する作品であったことを立証している⁵。そして、この classicism (古典模倣主義) と共に、造語や外国語の使用、恋愛詩中での法律用語のパロディ的使用、括弧を用いた複雑で重厚な文章構造、全篇に渡る統一的メタフォアの使用等の特徴が、この「二番」という作品が、駄作どころか、ダンにとって技巧を凝らし、十二分に練り上げた野心作、力作であったことをうかがわせている。

(1)

では、まず最初に、先に触れたように、この詩に見られる、〈へば詩人〉や〈悪徳弁護士〉以外の人々への批判、風刺という点について考えてみたい。そもそも、風刺に用いられるイメージが、俗悪で醜く、嫌悪の情を懐かしめるものが多いのは、当然のことであろうが⁶、この詩の場合も、詩人や弁護士を批判する為に用いられたイメージそのものが極めて辛辣であり、彼ら以外の当時の人間達——といっても、特定の個人への攻撃ではなく、類型攻撃なのだが——への痛烈な風刺となっている。

例えば、次の引用は〈へば詩人〉達のふ甲斐なさを描いているところに続く箇所だが、

But these do mee no harme, nor they which use
To out-doe Dildoes, and out-usure Jewes;
To'out-drinke the sea, to'out-sweare the Letanie;

[11.31-33]

ここには、当時のエリザベス朝社会で人々を悩ましていた高利貸しや好色家、大酒飲みや度々悪態をつく人間への風刺がある。又、

Who with sinnes all kindes as familiar bee
 As Confessors; and for whose sinfull sake
 Schoolemen new tenements in hell must make:
 Whose strange sinnes, Canonists could hardly tell
 In which Commandements large receipt they dwell.

[11.34-38]

上記引用では、話者は表向きは詩人の罪深さを批判しているが、その陰で、当時の fallen clergy, つまり、信仰の本道を忘れ、つまらぬ細目に拘っている、精神的に墮落した宗教人を皮肉っている。何故なら、“Confessors”（告解聴聞僧）と同じ位、あらゆる罪に詳しい詩人がいるにしても、“Schoolemen”（スコラ派神学者）は彼らを地獄のどの部屋に割り当てるのかを神でもないのに考え、“Canonists”（教会法学者）は彼らの珍しい罪をどの戒律の中に分類するのかに苦慮している、というからである。

次の引用には、

jollier of this state,
 Then are new benefic'd ministers,

[11.44-45]

神の思し召しよりも世俗的地位の獲得を喜ぶ牧師の姿が皮肉られているし、

And to'every suitor lye in every thing,
 Like a Kings favorite, yea like a King;

[11.69-70]

では、弁護士は訴訟依頼人に向かって、寵臣や国王自身のように嘘をつく、と明確に直喩の形で、請願人達を舌先三寸で騙す国王や寵臣の姿が糾弾されてい

るのである。

そして、

for

Bastardy'abounds not in Kings titles, nor
Symonie'and Sodomy in Churchmens lives,
As these things do in him; by these he thrives.

[11.73-76]

この引用部分では、当時の国王には庶子が多かったこと、又、教会人の間では“Symonie”（聖職売買）や“Sodomy”（男色）が度々行われていたことが、あからさまに非難されている。“Bastardy”にしても“Symonie”にしても“Sodomy”にしてもすべて、当時の切実な社会問題であったから、話者はコスカスの悪徳ぶりを語りながら、同時に〈王室〉や〈宮廷〉〈教会〉という国の中枢部分をむしばむ病毒を鋭く攻撃しているのである。この74、75行と先に引用した69、70行が1633年版では編者の判断で削除されている事実は、これらの行に強い現体制批判があったことを立証していよう。

これらの人間の他、話者は負債者監獄でくどくど愚痴をこぼしている囚人も次のように揶揄している。

like prisoners, which whole months will swear
That onely suretiship hath brought them there,

[11.67-68]

又、ルターについての次の記述は、明らかにルター自身にあった、以前持っていた主義・主張を後でいとも簡単に撤回するという〈ご都合主義〉を鋭く指摘している。

as in those first dayes

When Luther was profest, he did desire
 Short *Pater nosters*, saying as a Fryer
 Each day his beads, but having left those lawes,
 Addes to Christs prayer, the Power and glory clause.

[11.92-96]

ここには、話者のプロテスタント批判が感じられるが、次の引用には、“Good workes”（善行）を公的に認めながら、人々に実践させることができないでいるアングリカンの牧師への軽い皮肉が認められよう。

But (Oh) we'allow

Good workes as good, but out of fashion now,
 Like old rich wardrops;

[11.109-111]

そして、土地の売買を仲介する際に、依頼人には気付かれずに、後で自分の名前を書き込む為に“*ses heires*”（相続人）のところを空欄にしておくコスカスの狡猾さが次のように喩えられているが、

As slily'as any Commenter goes by
 Hard words, or sense; or in Divinity
 As controverters, in vouch'd Texts, leave out
 Shrewd words, which might against them cleare the doubt.

[11.99-102]

これらの行は、“Commenter”（注釈者）や“Controverters”（論争家）らの学者達への極めて辛辣な批判となっている。話者は、注釈者も論争家も悪徳弁護

士程は実害をもたらさないにしても、結構、学問的には狡いことをしており、人を騙すという点では悪徳弁護士と大差がない、いや、それどころか、学者達の偽善的態度の方がずっと悪質であったかもしれないと考えているのである。

以上のように、話者は直喩を多用し、〈へぼ詩人〉や〈悪徳弁護士〉以外の当時の墮落した人間達を、上は国王から下は囚人に到るまで種々列举し、無鉄砲すぎるのではないかと、思える位露骨に風刺を行なっているのである。

(2)

ところで、話者の風刺は今まで述べてきたような直喩を用いた Characters 的、つまり、〈人さまざま〉的批判に止まる訳ではない。話者は然り気なく、社会そのものへの批判も次のように行なっている。

話者は、弁護士となったコスカスが人々を騙し、悪事を重ねつつ土地を買い込み、大地主になってゆく有様を、彼は国土全体、つまりスコットランドからワイト島まで、ウエールズの間からドーバーの浜辺まで、をコンパスで測るだろうと、大架沙に描いてみせるが、

Shortly ('as the sea) hee'will compasse all our land;
From Scots, to Wight; from Mount, to Dover strand.
And spying heires melting with luxurie,
Satan will not joy at their sinnes, as hee.

[11.77-80]

79行目の“heires melting with luxurie,”（贅沢で財産も体も駄目にしてしまう遺産相続人）という語句には、コスカスが代表する新興成金階級に土地を騙し取られてしまう当時の土地所有貴族の愚かさとその乱れた暮らし振りが暗示されている。つまり、騙すコスカスらも悪いが、騙される遺産相続人達も罪深く、彼らも又社会の腐敗に加担していることになる、と話者は主張する。この

社会全体が病んでいるという考え方は、1598年始め頃の作とされる「風刺詩五番」中にも次のように表現されている。

All men are dust;
 How much worse are Suiters, who to mens lust
 Are made preyes? O worse then dust, or wormes meat,
 For they do'eate you now, whose selves wormes shall eate.

[II.19-22]

又、81行目から86行目までのコスカスを“thriftly wench”に喩える箇所は、

For as a thrifty wench scrapes kitching-stuffe,
 And barrelling the droppings, and the snuffe,
 Of wasting candles, which in thirty yeare
 (Relique-like kept) perchance buyes wedding geare;
 Peecemeale he gets lands, and spends as much time
 Wringing each Acre, as men pulling prime.

[II.81-86]

81行目の“thriftly”をつましい、ととるのか、けちな、ととるのかでコスカスの印象が分かれるが、86行目の“as men pulling prime”（人々がブリメロ遊びで遊んでいる間）には、明らかにものにつかれたように賭けトランプに熱中している当時の宮廷人達の様子が暗に皮肉られている。この箇所についてミルゲートは、

The poor quality of candles, the poverty of servants (and the decay of moral sense in a community that allows both), the keeping of relics, and obsessive gambling with cards, are all used to illustrate and

sharpen the attack on legal malpractice in the land-grabbing frauds of
the time;⁷

と述べている。だが、この「二番」には、ミルゲートの指摘するコスカスの悪行への非難と同時に、貧富の隔差を許し、コスカスの土地横領詐欺を助長する社会そのものへの、極めて痛烈な批判が認められるのである。

(3)

では、話者はこの墮落した社会全体は一体何によって動かされていると考えているのであろうか。勿論、〈時〉“Time”によってである。とすると、この〈時〉は、この「二番」の中では、どのように描かれているのであろうか。

the insolence

Of Coscus onely breeds my just offence,
Whom time (which rots all, and makes botches poxe,
And plodding on, must make a calfe an oxe)
Hath made a Lawyer, which was (alas) of late
But a scarce Poët;

[11.39-44]

ここには、弁護士の数が多すぎて困っていたのに、時間さえたてば、コスカスをも弁護士にしてしまう当時の法曹界への当て擦りがある。が、この点よりはるかに重要なのは、ここに“time (which rots all,”つまり、〈万物を腐敗させる時〉という〈時〉の概念が認められるということである。話者は〈時〉が小さなおできを恐ろしい梅毒に変え、かわいい子牛を獐猛な雄牛に変えるごとく、コスカスを〈へぼ詩人〉から〈悪徳弁護士〉に変えてしまったと考えているが、こう考える背後には、明らかに〈この世界は病んでいる〉〈この世界は破滅に向かっている〉という当時のダンが抱いていたあの現実認識が認められよう。

これは勿論、後年、『周年追悼詩』の中で繰り返し嘆かれる考え方であるが⁸、実は初期に書かれたこの詩の中でも、詩全体に渡って、種々なイメージの使用と見事なテクニクの駆使によって強調されている。ところで、この点についても、レインが綿密な分析によって、次のように説明しているが、

These bitter lines on Time represent the argument around which the poem's designs revolve. They clarify the structural role of Coscus. He and his career are symbolic counters for Donne's vision of universal decay. Coscus' "growth" within the poem from poet to lawyer, the surface movement which seems to account for the curiously indirect opening, structurally validates the poem's vision of Time, for Coscus' career demonstrates that in time men become deformed and plunge into greater and greater venality and beastliness.⁹

この彼の解釈は十分傾聴に値すると思われる。何故なら、このようにコスカスをつまらぬ〈へぼ詩人〉から、悪魔以上に人々の罪を喜ぶ〈悪徳弁護士〉に変える、この〈時〉の破壊的な力こそ、この詩の風刺の最大の主題であったからである。こう考えると、今まで分裂していたかに見えた二つの部分の一つの主題のもとに収斂する。そして、私達は、話者がどうして、〈へぼ詩人〉や〈悪徳弁護士〉だけでなく、種々な階層の人間や社会そのものをあれ程厳しく批判していたかが、納得できるのである。ミルゲートはダンの風刺詩中の“allusion”（言及、引喩）について、

... the use of ironic or illustrative allusion to things not strictly relevant to the main subject of satire.¹⁰

と指摘しているが、この「二番」に関してはこの指摘は余り的を得ていない。何故なら、作品全体に散在するイメージの殆どが、〈この世界が破滅に向かっ

ている)という主題に向かって、相互に関連しあい響きあっているからである。

(4)

となると、この万物を破滅へと導く〈時〉に支配された現実社会にあって、風刺詩人はどのように生きることが出来るのであろうか。

まず、詩人の現状については、この「二番」には次のような描写がある。

Though Poëtry indeed be such a sinne
 As I thinke that brings dearths, and Spaniards in,
 Though like the Pestilence and old fashion'd love,
 Ridlingly it catch men; and doth remove
 Never, till it be sterv'd out; yet their state
 Is poore, disarm'd like Papists, not worth hate.

[11.5-10]

ここで話者は、〈詩〉は飢饉やスペイン人の侵入をもたらし、疫病や時代遅れの恋のように人々に不可解に取りつくが、実は詩人達の現状は旧教徒のように惨じめで無防備であると憐れみ、これに続けて、彼らの気の毒な生活振りを卑近なイメージを用いて、ユーモラスに描いている。

One, (like a wretch, which at Barre judg'd as dead,
 Yet prompts him which stands next, and cannot reade,
 And saves his life) gives ideot actors meanes
 (Starving himselfe) to live by'his labor'd sceanes;
 As in some Organ, Puppits dance above
 And bellows pant below, which them do move.

[11.11-16]

自分自身は死刑を宣告されていながらも、隣りの文盲に neck verse (免罪詩) を教える詩人も、無学で売れない役者に苦心して脚本を書く飢えた詩人も、上部で人形が踊っているオルガンの下で、空気を送る為にあえいでいる“bellows” (ふいご) のように、つまらぬ人々のつまらぬ行動の裏方的存在でしかないのである。

では、何故、こういうことになってしまったのか。それは、〈詩、つまり言葉〉そのものに過去にはあった“witchcrafts charms” (呪術的な力) が失われてしまい、その結果、詩人は社会的役割を果たしたくとも、果たせなくなっているからである。

One would move Love by rimes; but witchcrafts charms
 Bring not now their old feares, nor their old harmes:
 Rammes, and slings now are seely battery,
 Pistolets are the best Artillerie.

[ll.17-20]

詩人は詩歌で相手の女の恋心を掻き立てることはできても、恋を成就させることはできない。20行目の“Pistolets”は、ここでは、ピストルという意味とピストール、つまり、スペインの金貨という意味の両義に用いられており、ピストルが今や戦場で最高の武器となったように、恋愛においてもすべては金次第、女はお金になびく、というのである。この恋愛の墮落は、勿論、〈時〉の破壊力のなせるわざである。

以上のように、話者は詩人達の窮状を自己諧謔的に語る。だが同時に、自分達詩人自身も又、〈時〉によって、墮落させられていることも忘れてはいない。自分を含めた詩人達への批判は、次のように、痛烈である。

And they who write to Lords, rewards to get,

Are they not like singers at doores for meat?

[11.21–22]

話者はここで、貴族に取り入って、報酬を得る為に詩を書く詩人を、食物を求めて戸口で歌う歌手のようだ、と軽蔑している。こういう話者の態度は、当時、報酬目当ての作品が多数書かれていたことを逆に証明していると同時に、話者自身は、詩はもっと崇高な目的を持って書かれるべきもの、と考えていたことを有弁に物語っている。そして、こう考える話者だからこそ、彼はコスカスのように単に金儲けの為だけに弁護士の仕事をする人間を、売春宿で売春をする売春婦よりも破廉恥だと軽蔑するのである。

but men which chuse

Law practise for meere gaine, bold soule, repute

Worse then imbrothel'd strumpets prostitute.

[11.62–64]

そして、ここに続けて、話者は、他の人が書くからといって、靈感も受けず才能もないのに詩をかく詩人を嘲笑し、倫理面で墮落している盗作詩人を医学用語を用い、かなり下品な言葉で痛罵している。

And they who write, because all write, have still

That excuse for writing, and for writing ill.

But hee is worst, who (beggarly) doth chaw

Others wits fruits, and in his ravenous maw

Rankly digested, doth those things out-spue,

As his owne things; and they are his owne, 'tis true,

For if one eate my meate, though it be knowne

The meate was mine, th'excrement is his owne.

(5)

それでは、このように社会をも自分も含めて人々をも攻撃し続ける話者、即ち、風刺詩人である話者が論拠とする倫理的基盤はどのようなものであろうか。この点に関しては、この「二番」の最後の部分に、まず、次のような数行がある。

Where are those spred woods which cloth'd hertofore
Those bought lands? not built, nor burnt within dore.
Where's th'old landlords troops, and almes?

[II.103-105]

この引用中、103行目の“woods”は古い価値大系を象徴し、104行目の“bought lands”はコスカスラによって蚕食された荘園を指し、105行目は中世以来の土地所有を基盤とした領主と家臣との主従関係が、都市の新興成金階級の出現によって今や崩壊してしまったことを暗示している。これらの変化もすべて、〈万物を破壊する時〉のせいであることは言うまでもない。〈時〉は樹木を裸にし、大邸宅も修道院も廃屋にしてしまうのである。

ところが、だからといって、話者は古い価値大系の世界へ戻りたい、と言っている訳ではなく、

In great hals
Carthusian fasts, and fulsome Bachanalls
Equally I hate; meanes blesse; in rich mens homes
I bid kill some beasts, but no Hecatombs,
None starve, none surfet so;

[II.105-109]

精進料理も飽食の宴もともに嫌悪し，“meanes blesse”と中庸の道を選んで
 いる。だが、この *via media* という主張が幾分説得力を欠くのは、これらの行に
 続けて話者が、

But (Oh) we'allow

Good workes as good, but out of fashion now,

Like old rich wardrops;

[11.109-111]

と共感してくれる者の少ない自分達の立場を“out of fashion”といとも安易に
 認め、

but my words none drawes

Within the vast reach of th'huge statute lawes.

[11.111-112]

と言い切っているからだと思われる。もっとも、この最後の2行については解
 釈が分かれ、ミルゲートは、

Lawyers and lawsuits abound, legislators swell the statute-books to
 enormous proportions; but no one can accuse the satirist of an offence
 against any law . . . for all he says is true.¹¹

とホラティウスの風刺詩第二卷第一番の終りで示されている弁明に近いとらえ
 方をする¹²つまり、詩人の言葉は真実なのだから許される、ととる。これに対
 し、ジョン・ショークロスは次のように考える。

But it seems that no one within the vast reach of law is drawn by

Donne's words to reform or to force reform of this "one state/ In all ill things so excellently best"¹³

つまり、この社会で広大な網の目のように張りめぐらされた制定法のもとで生活している人は慎重で用心深いので、話者の言葉によって、次の引用に示されているようにコスカス的人間にすっかり牛耳られているこの現実社会の改革、改良へと突き動かされることはない、と解釈するのである。

In parchments then, large as his fields, hee drawes
Assurances, bigge, as gloss'd civill lawes,

[11.87-88]

このショークロスの解釈に賛成する人は多いが、ここに表われている話者の態度を絶望ととるのか、あるいは保身の為の曖昧な言い逃れととるかで、再び解釈が分かれよう。確かに作品全体の流れからは絶望説が幾分有利ではあるが、話者の心境はまだ悲嘆というところまではいっていないという気がする。しかし、とにかく、話者が風刺詩人の社会的役割にある限界を感じていることだけは確かである。

3

「風刺詩一番」では、話者は彼がロンドン市内で目撃した人々の墮落と腐敗の諸相を風刺の標的としている。ところがこの「風刺詩二番」では、「一番」における以上に重大な悪徳が風刺の主題となっている。話者は個々の罪ではなく、あらゆる罪に汚れた社会全体を問題にしているのである。コスカスは崩壊に向かっている社会全体の要約的・象徴的存在であり、彼がとるに足らぬ〈へば詩人〉から悪魔的な〈悪徳弁護士〉へと変わることで、〈万物を腐敗させる時〉に支配されている社会の当然辿らざるをえない変化が具現されているのであ

る。

ところで、「一番」の話者には自分が余り見えていなかった。だが、「二番」の話者にはかなり見えている。しかしながら、かえってそのことが、話者に一層、自分も又その腐敗した社会の一員であることを意識させ、自らの批判力の限界を痛感させてしまうのである。話者は人間の弱さと醜さを知っていたから、コスカスを悪徳弁護士として非難しつつも、コスカ스에騙される人間達の愚かさや狡さにも目をつぶることが出来なかったのである。

この意味において、多くの研究者の指摘を待つまでもなく、この「二番」とエジャトン卿への書簡詩として書かれた「風刺詩五番」とは、内容上かなり密接に関連しあっていると思われる。何故なら、「五番」の中では話者は、コスカスのような人間の寄食を許さない正常な社会機構の実現に向けて、エリザベス女王の重臣の一人であったエジャトン卿の下で働きたいと考えているのに、この「二番」には、社会の腐敗と墮落の有様を描きつつも、風刺詩人にはなりきっていない、いや、なるつもりのない話者の姿が浮かび上がっているからである。この詩が書かれた頃のダンは、リンカーン法学寮に在籍し、法書生として法律の勉強をするかたわら、〈新哲学〉や教父神学も含めあらゆる学問に貧欲に取り組んでいたという。その上、前年、カトリックの司祭を匿ったかどで大切な弟をニューゲートの獄舎で獄死させてしまっていた彼は、政治と宗教という問題や信仰のあり方にも多めに悩んでいたらしい¹⁴。結局、この「二番」には、このように腐敗墮落し、混乱を極めていた社会の中で、絶望感におそわれつつも殉教者になるつもりはなく、しぶとく生き残る道を模索している二十代始めのダンの姿が垣間見られるのである。それ故、この詩の末尾に示されている〈中庸〉の道選択の姿勢は、英国国教会の説教師となる晩年の彼の生き方を早くも予測させる要素の一つであったと思われる。

(1986. 1. 31)

※ 本稿は17世紀英文学研究会関西支部第79回例会（1985年12月23日）において口頭発表したものに一部補筆したものである。

注

- 1 Wesley Milgate ed., *John Donne, The Satires, Epigrams and Verse Letters* (Oxford at the Clarendon Press, 1967), p.128.

以下、ダンの satires の引用はすべてこの版からとする。

- 2 *Ibid.*, p.xxiv.

. . . the second and fourth Satires fall apart badly,

- 3 拙稿「ジョン・ダンの「風刺詩一番」の話者について」*ATHENA* (愛知淑徳短大英文学会誌) 第19号 (1985年) pp.1-19, 参照。

- 4 Clayton D. Lein, "Theme and Structure in Donne's Satyre II," *CL*, 32 (1980), pp.131-133.

- 5 拙稿「1590年代の風刺詩と Donne の『風刺詩集』」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第22号 (1983年) pp.59-75, 参照。

- 6 アーサー・ボラード著, 鈴木善三訳『風刺』(研究社, 昭和47年) p.102.

- 7 Milgate, *op. cit.*, p.xx.

- 8 【周年追悼詩】中では、次のように表現されている。

So did the world from the first hour decay, *First Anniversary*, l.201.

But as thou sawest it rotten at the hart, *First Anniversary*, l.242.

Forget this rotten world; *Second Anniversary*, l.49.

Thinke that thy body rots, *Second Anniversary*, l.115.

上記はすべて Frank Manley ed., *John Donne: The Anniversaries* (The Johns Hopkins Press, 1963) から引用。

- 9 Lein, *op. cit.*, p.134.

- 10 Milgate, *op. cit.*, p.xix.

- 11 *Ibid.*, p.139.

- 12 Horace, *Satires, Epistles and Ars Poetica* (Loeb Classical Library Series, no.194, 1926) p.133.

- 13 John T. Shawcross, "All Attest his Writs Canonical", *The Texts, Meaning and Evaluation of Donne's Satires*, in *Just So Much Honor* (The Pennsylvania State Uni. Press, 1972), p.256.

- 14 R. C. Bald, *John Donne, A Life* (Oxford at the Clarendon Press, 1970), pp.53-79.